

徒然なるままに…49

～全体授業研③…子どもの主体的な学びと教材分析～



平成28年9月16日
白鳥小学校 研修部

はじめに

暑かった夏にも、少しずつ陰りが見えてきました。いよいよ、秋の到来です。それぞれがそれぞれの秋を楽しみたいものです。私は、専ら「食欲」になりそうですが…。

今回の全体授業研は、3年生の提案でした。3年生のお二人は、初任者実地指導の授業と今回の授業の二つを同じ時期につくらなければならなかったために、大変ご苦労されました。その上、研修部の度重なるダメ出し（ダメ出ししたのは、私だけではありませんよ!。）にも耐え、やっとの思いで授業まで漕ぎ付けられました。まず、そこに、大きな「お疲れ様。」を贈りたいと思います。

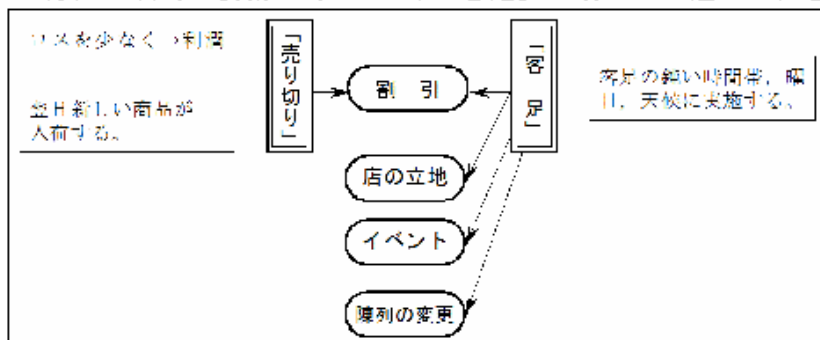
今回は、「教材分析・解釈」と「子どもの主体的・対話的な学び」をキーワードに、今回の研究会について振り返ってみたいと思います。木村先生、内田先生にまとめ、深めていただきましたので、蛇足になるかもしれませんが、よかったら、お付き合いください。

1 教材分析・解釈のあり方

よく「教材研究」と言いますが、これは、様々な調べ活動を通して、教材として取り上げる事象を分析し、解釈することとらえることができます。教材を分析・解釈するために必要なこととして、次の2点が挙げられるでしょう。

1点目は、教材を違った切り口・観点から見ることです。一つの事象を一義的にとらえるのではなく、様々な角度から見つめ、違った切り口・観点から迫っていくことです。

これについて、今回の授業を例に述べてみます。スーパーマーケットの戦略である「割引」について、「売り切り」を切り口に迫っていくと、①売れ残りのロスを少なくして、利潤を上げようするため、②翌日必ず新しい商品が入ることを示すためという、店側の意図が見えてきます。一方、二次的な要素であっても、「客足」を切り口に迫ると、客足の鈍い時間帯や曜日、天候などに合わせて割引を行うことによって、客足を伸ばすという別の意図が見えてきます。そして、「客足」という切り口は、店の立地や陳列された商品



〔資料1：「割引」に関する見方と構造〕

の変更、イベントなど、別の事象ともつながってくるのです。これについて図示すると、前頁の〔資料1〕のようになります。これまでとは違った切り口を見つけ、迫っていくことによって、新たな社会の有り様が見えてくるとともに、新たな見方・考え方を獲得することになると言えるでしょう。

2点目は、学習指導要領の目標・内容を解釈することです。指導要領の記述や教科書・副読本の内容を「ねばならない。」的にとらえるのではなく、教師一人一人の興味や新たな気付きをもとに、様々な切り口から迫ってみることが必要だと考えられます。

内田先生のお話にもあったように、「フジ」と「マルナカ」という同じスーパーマーケットを比較する授業を考えてみましょう。どちらの店も、それぞれの工夫をもとに、集客のための戦略を打っています。しかし、それらの戦略にも、品揃えにも、設備にも、違いがあります。違いがあるわけを考えることを通して、店側が客層、言い換えれば、地域性に合わせた店づくりを行っていることと同時に、自分たちの地域の特徴・特性に気付く学習を展開することができるでしょう。

指導要領には、この単元の内容について、「地域の販売にかかわる仕事をしている人々がさまざまな工夫をしていることを理解すること」と示されています。この記述を狭義にとらえると、この授業の内容は、外れているとなるでしょう。しかし、「客層」・「地域性」という別の切り口から、新たな社会を見ることができるとは価値があるのではないのでしょうか。

2 子どもが主体的・対話的に思考する（→深い学び）ために

最近、木村先生から、特に、子どもの主体的・対話的な学び、本校的に言うと、子どもの「学び合い」のある授業についての話がよく出ます。それは、このような学習が大切だからにとどまらず、うまく機能・展開されていないことを問題視されているからだと感じます。これについては、48号で、詳しく触れさせていただきました。

今回の授業を通して、子どもの主体的・対話的な学びを展開するために取り入れていただきたいこととして、次の二つを感じました。

一つ目は、「待つ」ことです。考え、学び合う社会科授業づくりを目指して以来、先生方が子どもの発言をつなぐことを意識され、子どもの意見交流による探究的な授業づくり行われています。その一方で、発問した後、子どもが発言した後、先生の筋書き通りに展開しなかったときなど、つい、発問を替えたり、補助発問をしたり、意見を言ったりしていませんか。「〇〇劇場」ではありませんが、先生方の発言が中心となる授業になってはいませんか。問いを投げ掛けたら、先生方は、子どもが考え、意見として言語化するまで待つ、子どもの考えを整理したり、そこまでの思考を振り返ったりして、探究する足並みをそろえるよう待つことが必要だと考えられます。



二つ目は、「仕組む」ことです。私たち授業者は、教材の構造と授業展開（＝思考の過程）を知っているから、筋道立てて考えられますが、子どもは、知らないのです、闇雲に問うたり、「考えよう。」と促したりしても、筋道立てて考えることはできません。そこで、授業者の仕掛けとサポートが必要となるのです。問いに至る手立てによって問いと出会い、予想から論点を整理し、論点ごとに、資料などから問いに迫ったり、さらに問い直して深めていくという一連の思考の過程をストーリーとして仕組むことが必要だと考えられます。そして、子どもたちの発言や話し合い活動の様子を見とりながら、思考の過程を着実に踏み、筋道立った思考になるよう働きかけたり、待ったりすることが必要だと考えられます。

一方、子どもの発言を問い直したり、引き出したりすることも必要です。です。「ということは、どういうこと。」「結局、どういえることになる。」などというように、丁寧に、ある意味、しつこく追い込むことです。これによって、子どもの発言自体やいくつもの発言をつないで考える(類比・因果・関連させる)よう促し、そこから見えてくること、いえることへと、認識を詳しくしたり、広げたり、意味付けるなどして深めることを促すことになると考えられます。



おわりに

今回の協議会は、非常に有意義なものになったと思います。質問から議論につながっていき、教職員みんなで、それぞれ、アクティブに、教材・授業構成の分析を行うことができました。木村先生は、本校の協議会の内容を褒めてくださいます。改めて、本校の先生方の授業力の向上を感じています。

授業力は、授業を見合い、検討し、改善していかなければ、付いていきません。今後とも、一人一人が考えを持ち寄り、全員で授業研究していけますよう、ご協力お願いいたします。